新たに確認された 広東住血線虫の中間宿主と待機宿主

上：ヒラコウラベッコウガイ
下：ニューギニアヤリガタリクウズムシ

広東住血線虫（かんとんじゅうけつせんちゅう）は、ヒトに感染すると髄膜炎や脳炎をおこすことが知られています。成虫はドブネズミやクマネズミの肺動脈に寄生して、卵を産みます。孵化した幼虫(１期幼虫)は糞と一緒にネズミの体外に出ます。幼虫はそのままだと死んでしまいますが、ナメクジやカタツムリに出会うとその体内に入り込み、感染力をもつ３期幼虫まで発育します。成虫が寄生するネズミは終宿主、幼虫が成長発育するナメクジやカタツムリは中間宿主と呼ばれ、中間宿主を食べるカエルや陸生のプラナリアは待機宿主と呼ばれています。

本県では中間宿主として、アフリカマイマイやアシヒダナメクジ、待機宿主として、ミヤコヒキガエルが知られていました。しかし、2000年～2003年の調査で中間宿主としてヒラコウラベッコウガイ (写真上)、待機宿主としてニューギニヤヤリガタリクウズムシ(写真下)が新たに確認されました。前者は1975年に石垣島で、後者は1990年に沖縄本島で生息が確認された外来種で、第３期幼虫の感染率が高いこともわかりました。

ナメクジやカタツムリはキャベツ等の野菜に着くことがあるので、野菜を調理する時にはこれらの軟体動物がいれば取り除いて、十分に水洗いして調理しましょう。 （微生物室）

久米島で初めてのハブクラゲ刺傷被害

平成16年７月28日、久米島町イーフビーチで観光客（小学生）2人が遊泳中にクラゲによる刺傷を受け、病院で治療を受けました。翌29日、消防署員及びビーチ関係者が調査を行ったところ、3匹のクラゲが捕獲され、ハブクラゲと同定されました。さらに、8月2日にも同ビーチで観光客がハブクラゲによるとみられる刺傷に遭いました。

これまで、久米島ではハブクラゲによる被害はなく、生息していないと考えられていました。ハブクラゲが確認されたため、衛生動物室では8月4・5日及び19・20日に現地調査を行いました。その結果、同ビーチでスノーケルリングで3匹のハブクラゲを捕獲しました。同時に、町役場に関係者を集めハブクラゲに関する講習会を行いました。

今回の調査では、捕獲したハブクラゲが島外から移動してきたのか、久米島で生まれたのかは判断できません。ハブクラゲ定着の有無を判断するためには、幼クラゲが発生する来年の6～7月に詳細な調査が必要です。また、慶良間諸島ではまだハブクラゲ刺傷被害が無いので、分布していないと考えられています。今回、なぜ急に久米島にハブクラゲが出現したのかは、今後解明すべき課題です。

イーフビーチで捕獲されたハブクラゲ

（衛生動物室）